梅崎春生『桜島』―美しい死―

甲山 羊二

梅崎春生の『桜島』は、昭和二十一年九月「素直」創刊号に収録され、昭和二十三年三月に大地書房より刊行された短編小説である。著者にとって『風宴』に続く二作目の発表作品ということになる。

本作品の特徴は、日常的に蔓延する二人称的または三人称的死、目前に迫りくる仮定的かつ一人称的死、それら全ての死を、ひとつの死と捉えているところである。死は恐怖を伴う。しかも戦時下における死は無残である。そこにあえて美を求めることにより、死を現実から昇華させようとする。そうした「私」の思索と探究とが随所にみられるところに、他の戦争文学には見られない特異さがある。

「私」が求めようとした美しい死とはどのようなものか。否応なく迫り来る死、そこにあえて美を求めるというのは、むしろ逃避に他ならないのではないか。そうした矛盾についての説き明かしが、「私」の思惑そのものとして描写されている。自らの体験を主観的に、そして小説として著わす。梅崎春生によるそうした指向が冷静であるが故に、読者もまた死の考察へと自然に引き込まれていく。

戦時下における死。そして美しい死。これらは一見逆行するかのように思われる。しかし、ある意味においては正論とも受け取れる。それは死への強い欲求によるものではない。死を待ち望むこととも異なる。情緒的な死とも一線を画す。「私」が帰着した美しい死とは、覚悟を伴った死、まさにそれそのものに他ならない。従って、ここでの美しさとは、視覚的なものとは全く無関係なものである。

右耳のない妓と、死の恐怖と死に方について語られる。そこで「私」は瞬間的に死を身近なものと感じる。ただし、それ故に、死に対する不吉さを覚える。そこには覚悟はない。覚悟の欠如が死への恐怖へと繋がり、死を一層身近なものとして捉える感覚と直結していく。深まる思索は恐怖を妨げる方法ではない。それは「私」にとって覚悟を生み出していく為の、深遠な行為そのものであった。

死ぬのは、恐くない。いや、恐くないことはない。はっきりと言えば、死ぬことは、いやだ。

しかし、どの道死ななければならぬなら、私は、納得して死にたいのだ。（『桜島』作中より）

作中における「私」の思索とは、まさに探求そのものである。それは生まれてから今日まで続く、生活のなかでの必然とした行為である。そうした行為が、死を目前とした状況下において、更に研ぎ澄まされ、美しい死、納得の上での死、覚悟をもっての死へと美化されていく。そうして、死はその瞬間でしか分からないものとする。これらは「私」にとって、死についての達観を意味するのだろう。

しかし、実際に死を目の前にした時、「私」は生への執着を思い自嘲する。それは生きている人間の、死についての思索が脆弱だったということではない。生きることの儚さ、自らの内にある臆病さを痛感したからだろう。見張りの男の死体を目の前にすることで、破滅のうちに潜む醜悪を覗き見ることになる。そして、それによって、生きることの情熱が呼び覚まされていく。死を直視することにより、ここから「私」の生は真実さを帯びるものとなるのである。

一方で、見張りの男についての死の描写は、美しい死についての解答ともなり得る。そこには苦痛の形跡は微塵も見られない。そこにあるのは、平凡な市井人の表情でしかない。よって、「私」の死への恐怖は前面には表れない。男の死に見られるのは、普通の、至極一般的なものでしかない。現実の死であるにもかかわらず、一切の恐怖を伴わない死、真逆ともいえる死の様相があったのである。

生きているという、いわば生の実感を味わった者だけに与えられる死についての指向は、惰性的感覚のなかでは全く意味をなさない。覚悟を内に秘めた者だけに、美しい死へと至る決定的要件が与えられる。では、ここでの覚悟とは、一体どのようなものなのか。これこそが、作者の戦争体験の核をなすものであると同時に、私小説においての、作者個人の思想信条の根幹になるものであると考える。

例えば、知覧や万世や鹿屋においては、そこに散華という美化された言葉が鎮座する。これは空の持つ遥か彼方という印象が大きく関与する。しかし、水上特攻の震洋もまた回天と同様に、計り知れない孤独、そこに海の持つ暗澹たる印象が加わることで、その悲惨さは倍増する。だからこそ、死は恐怖の対象であり、また無念の対象でもあり、生への執着を持たざるを得ないといった結果を導く。

生きようとする情熱が、現実にある死の中に介入することで、死に対する新たな思惑が構築されていく。そうして生と死への主体的な取り組みが開始される。これこそが死の覚悟である。覚悟は単に死にのみに向けられるものではなく、生に対しても同等に向けられる。そこでようやく美しい死という文学的表現にまで至る。覚悟のないところに、生も死もない。同様に、美しさなどもあり得ない。

美しい死が覚悟に起因するものであり、それこそが納得できる死であるとする根拠は、作中の最後の描写にも見られる。終戦の御詔勅後、吉良兵曹長の表情が一変する。軍刀を持つ兵曹長に続いて、暗号室に向かう「私」は、いよいよその覚悟を実践することになる。ここはそれを類推できる場面である。「天上の美しさ」は、「美しい死」と「美しい覚悟」の両面をなす、象徴的表現として描かれる。

生と死が対極にあるものではなく、また相対的なものでもなく、常に隣り合わせにあるもの、生と死は一体のもの、それらを、本作品は積極的に訴えてくる。生のなかに死は必然と存在し、死のなかに生は厳然と存在する。生と死は、生への情熱と、死への覚悟によって、それぞれが充満した内容を持つに至る。それだけではない。そこには「人間」が表れる。『桜島』はそのことを教示してくれる。

〈参考文献〉

池田純溢「梅崎春生　人と文学・代表作解説・研究動向」（浅井清　佐藤勝　篠弘　鳥居邦朗　松井利彦　武川忠一　吉田熙生編　『新研究資料現代日本文学第二巻小説Ⅱ』明治書院、二〇〇〇年）